

泰晤士小鎮
THAMES
TOWN

関係性の 未来

上海の隣にイギリスが



シェイクスピアの像



テムズタウンの入り口



川にかかる橋の上からの眺め



住宅街を臨む



教会の右(写真奥)が商業地区

2006年10月、上海郊外に「小さなイギリス」が現れた。その名も「テムズタウン(泰晤士小鎮)」。イギリスのさまざまな時代の建築物をそのまま中国で作りあげ、ひとつの高級住宅街にしてしまったのだ。格差が限りなく広がる中国で、最も経済的に成功をおさめた最富裕層に人気を集めるこの異次元空間を歩いてみた。そこには現代の中国のひとつの側面が、確かに映し出されている。



上海市

松江区

L.C.N.L
2



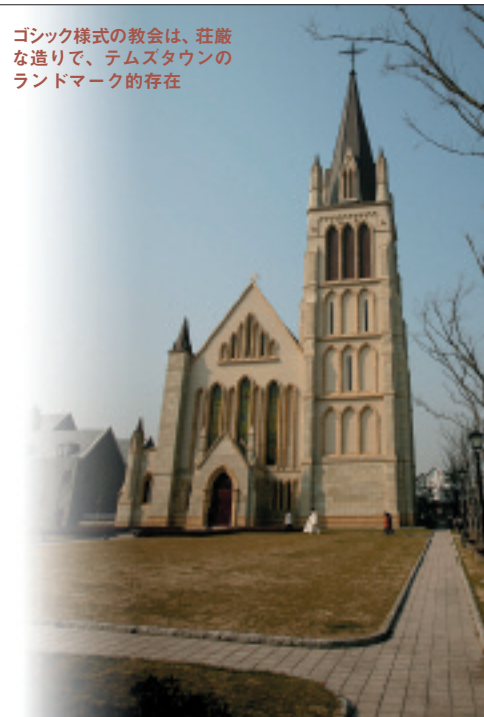
精巧に作られた模型でテムズタウンの全体が見渡せる

テムズタウン (泰晤士小鎮)

<http://www.thamestown.com/>
(中国語・英語)



ゴシック様式の教会は、荘厳な造りで、テムズタウンのランドマーク的存在





「テムズタウン」へようこそ!



ホテル

住宅街

石畳の商業地区

水上のレストラン

ヴィラの庭から



中国のGDP、4年連続で10%成長

中国国家统计局が2007年1月25日に発表した「2006年の国内総生産(GDP)の実質成長率」は、前年比10.7%であった。政府目標の8%を上回り、伸び率は4年連続で10%を超えた。GDP総額は20兆9407元。中国経済の規模は5年で2倍近く膨らんだ。



中華人民共和国国家统计局(中国語、英語)
<http://www.stats.gov.cn/>

写真: ©Alex Bu

富裕層のための「小さなイギリス」

街のシンボリックなカトリック教会の横は「チャーチストリート」。両側に古風な西洋建築が並び石畳のその通りを数分歩くと、「テムズスクエア」に着く。さて、ここでひと休み。オープンカフェで、コーヒーでも飲もうか――。

ヨーロッパの話ではない。紛れもなく中国、上海郊外のある一角の風景だ。街の名は「テムズタウン(泰晤士小鎮)」。2006年10月、上海の郊外、松江(ソンジャン)地区に現れたイギリス風の高級住宅街である。設計を担当したのは、英国のアトキンス・グループだ。

広さ1平方キロメートルほどのテムズタウンの敷地内に入っていくと、すぐに川が見える。

「テムズ」の名の通り、イギリスのテムズ川をなぞらえているようだ。その上にかかる橋を渡って、中心的な商業地区に足を踏み入れる。

通りの両脇に並び西洋建築は、古きヨーロッパを思わせる赤レンガや石造り。石畳の小道を歩くと、ヨーロッパさながらの通り名が書かれた案内板や、店舗風の建物のそれらしい英語表記が目に入る。チャーチルやシェイクスピアの像も姿を見せる。

「ラブスクエア(愛心広場)」というゆったりとした芝生の広場の後ろに、ゴシック様式の大きな教会が建っている。厳肅さと壮麗さを兼ね備えた、高さ67mのその石造り建築は、テムズタウンの雰囲気を決定的にしている。

「テムズタウンは住宅地としての利用以外にも、アート作品の展示、鑑賞、そして創作の場としての発展も目指しています。また、結婚の写真撮影ビジネスも始まっています。どちらも

広い敷地なので案内標識が必要となる。いろいろな場所や通りに英語名(この標識にある通りは中国語名)が使われている



赤レンガの建物、英語表記、石畳が続く商業地区は、西洋の街角を再現している





教会前での結婚写真の撮影



チャーチル像の後ろでも撮影



商業地区はコマースの撮影にも使われている



教会の周りには、このような結婚撮影ビジネスの会社が複数店舗を構える

空気がきれいで緑も多い松江の風土と、落ち着いた雰囲気の特ムズタウンならではの産業です

テムズタウンの開発、販売業者である上海恒和置業の徐綱(シュー・ガン)さんはそう話す。教会の周りでは、この日も何組かのカップルがウェディングドレスとタキシード姿で撮影を行っていた。確かに、この風景を活かすには最適のビジネスだ。

商業地区を離れると、舗装された広い車道が走り、その周囲に住宅地が広がる。もちろんすべてイギリス風の建築だ。ビクトリア様式、ジョージア様式などのマンション、ヴィラ(一軒家)には、計2000世帯、1万人が住めるという。

そのヴィラのひとつに入ってみる。1階には複数のリビングがあり、2階にもゆったりとした4つの部屋がある。1階と2階をあわせ広さは400㎡にも及ぶ。地下や3階もあり、まだ内装は完成していないものの、絵に描いたようなリッチな生活をイメージさせる。

ヴィラの値段は、500万~800万人民币(1元=約15円として、日本円で約7500万円~1億2000万円)。05年の上海市の就業者

平均月収が2235円であることなどを考えれば、一般的な中国人にとってはとても手を出せるものではない。が、「これだけの施設が揃った高級物件としては上海市内と比較しても決して高くない」と徐綱さん。

「マンションもヴィラも、ほぼ売れました。購入者は上海人が中心ですが、香港人や台湾人に加え、アメリカ人、フランス人など外国人もいます」

彼らこそが、この小さなイギリスの住人となる。

上海周辺に現れたミニヨーロッパの街

上海は現在、人口1700万人。そのうち400万人以上が他地域からの流入人口であり、2010年の万博に向けて膨張を続けている。ますます進む都市部の過密化を緩和すべく始めたのが、郊外の開発である。「一城九鎮」。すなわち、上海の周辺部に1つの大きな町(城)と9つの小さな町(鎮)を開発し、そこに人口を移動させるという政策だ。その「一城」にあたるのが、松江地区の松江新城(松江ニューシティ)である。

松江新城は、上海市内から南西に30キロ、

高速に乗れば30分ほど。いずれ60万人規模の街になると見込まれ、急速に開発が進んでいる。街中に大きなマンションが林立し、今夏には上海市内からの地下鉄も開通する予定だ。いくつかの大学もここに移転し、学園都市としても機能し始めている。まさに上海のベッドタウンの代表格になりつつある。

その松江新城のシンボリックな存在として誕生したのがテムズタウンだ。50億元(約750億円)をかけた政府主導の巨大プロジェクトなのである。

「上海市内ももはや、中国建築は少なく西洋風の建物ばかりになってきていますが、それでも伝統的な西洋建築というのは多くありません。そこにテムズタウンの独自性があります。街並も西洋風にしたこの空間は、留学などで海外生活を経験された方にとっては、外国を思い出せる場所として喜ばれるのではないかと考えています」(徐綱さん)

上海郊外のヨーロッパ風住宅街はテムズタウンに限らない。上海市の北28キロにある羅店(ルオディエン)にはスκανジナピア風の街が、西32キロの安亭(アンティン)にはドイツ風の街がそれぞれ完成している。その他に、イタリア風、スペイン風の街も建設中だ

400㎡の広さのヴィラはキッチンスペースもゆったり



オフィスなどが集まるビルの中



花屋やオープンエアのカフェが商業地区を彩る



工事中の建物





案内してくれた恒和置業の徐綱さん



テムズタウン内をサイクリングに来た年配の人々



いたるところに、この服装の守衛がいる



まだ工事中の建物も多い

という。「九鎮」にミニヨーロッパができそうだ。

現代の中国人の「西洋」への憧れの強さは、上海などでは至るところで感じるが、ここまで露骨に各国風の街がつけられている事実には驚かされる。毛沢東時代には、中国から西洋的影響の跡を消し去るためにあれこれと手を打っていた共産党政府が、今では自ら西洋風の街づくりを提案しているのは、なんと皮肉なことだ。が、時代は変わったのだ。

富裕層のシンボルとなるか、それとも……

昨年10月にオープンしたとはいえ、取材に訪れた今年2月の時点で、テムズタウン内をいくら歩いても、住人らしき人と出くわすことはなかった。上記の商業地区の店もほとんどが空っぽで、石畳の通りですれ違わないのは、建築現場の労働者たちばかり。人が住んでいる気配はない。

「今の段階で、どれだけの人が実際に住んでいるのかわかりません。多くの方は、セカンドハウスとして別荘のような感じでここを買っています。週末や長期の休みに来てゆっくり

する、という感じなんじゃないかな。ただ、今はまだ、テムズタウンの生活環境自体が十分整っていないのです。オープンしたとはいえ、家も店も多くはまだ内装のデコレーションを調べている段階です」

徐綱さんによれば、目標は2年以内に80%程度の人に住んでもらうこと。現在空っぽの多くの店舗には高級ブランドショップを誘致し、今年中に40%ほどをオープンさせたいとのことだ。

「人が住み始めなければ、店は開いてもらえないし、逆に、店が十分にオープンしないと、なかなか生活を始めてもらえないだろうということです。とりあえずハードはできたのですが、これからはソフトです。どうやって富裕層の方に満足してもらえる生活環境をつくれるかが今後の課題です」

また問題点といえば、建物が「すべてコピー」であるという点だ。たとえば、隣り合ったパブとフィッシュ&チップス屋は、イギリスのある小さな町からのそのままのコピーで、実際の持ち主からすでに抗議が届いている。違法性はないのだろうか。

「確かに建物はイギリスのコピーなのですが、法的に問題はありませぬ」

まったく意に介していないような徐綱さんを見て、テムズタウンとはいえ、そこはやはり中国だなと感じさせる。

最終的には、スーパーマーケット、映画館、ホテル、そして幼稚園や高校までが敷地内に行ける予定で、まさにひとつの街となる。

昨年打ち出された政府の不動産政策の甲斐もあってか、上海の不動産バブルは落ち着きつつあると言われる。法律により、投資目的で住宅を購入し転売することも以前よりは難しくなった。が、徐綱さんは、個人的な見解として、「購入者の2、3割は、投資目的なのではないか」と言う。

実際に投資目的の購入が多いとすれば、テムズタウンがどのような街としてスタートするかわからない。投資として買われた家が、松江にある大学で学ぶお金のある留学生たちによって借りられ、外国人の学生街になるなどということもあるかもしれない。

果たしてテムズタウンは、中国の富裕層の新しいシンボルとなるのか。それとも、バブル時代を思い出させる遺産として語り継がれることになるのか——。数年後が楽しみだ。

Text by : YUKI KON

店舗が入居していない建物が多い



松江新城(ニュータウン)にはテムズタウン以外にもこのような大きなマンション群がたくさんある。



テムズタウンのすぐ外の通り。松江新城(ニュータウン)らしい広い道

